

<2018～2021年度>

## 音声研究と音声教育

小松 雅彦／相原 昌彦

言語教育において、これまで音声教育はあまり実践されてこなかったが、徐々にその重要性が認識されてきている。このような動向の中で、本研究グループは幅広く音声とその教育について研究を行ってきた。なお、言語研究センター共同研究の期間は通常最長3年であるが、新型コロナウイルスの影響で研究の遅れがあったことが配慮されて1年間の延長が認められた。

筆者らが知る範囲で、本研究グループ開始の前年度（2017年度）には、日本音声学会から文部科学省に対して「指導要領に定める英語音声教育実現のための提言」が出された。2019年度には、文部科学省の「外国語（英語）コアカリキュラム」に英文法などと並んで「英語の音声の仕組み」が明記された。日本音声学会では音声学普及委員会があり毎年音声学セミナーを開催しており、『音声研究』では2020年に「音声学教育」の特集を組んだ。日本音響学会でも、2021年に音声コミュニケーション研究委員会が発足し、定期的に研究会を開いている。日本語学会では、2022年度に「第1回中高生日本語研究コンテスト」を開催し、その表彰作には音声・音韻に関連するものも含まれている。また、竹内京子氏により2021年度から「STのための音響学」という言語聴覚士向けの講座が開かれている。

本研究グループでは、2018～2019年度は、主に、イギリス英語とアメリカ英語の韻律の対照研究を行った。多言語音声コーパス MULTEXT Prosodic Database (1998)に含まれるイギリス英

語の音声データと試作したアメリカ英語版の音声の比較を、発話速度、リズム、イントネーションから行った<sup>[1,2]</sup>。アメリカ英語は「ゆっくりとした印象」「単調に聞こえる」、イギリス英語は「歯切れが良い印象」「大げさに聞こえる」と言われるが、その音響的な特徴を調べるのが目的である。予備的な分析の結果、発話速度については両者の差は見つけられなかった。リズムは Grabe & Low (2002)、Ramus et al. (1999)のいずれの指標でもアメリカ英語の方が強勢リズム的である可能性が示唆された。また、声の高さはアメリカ英語の方が変動が大きい傾向があり、イギリス英語の方が下降の傾きがやや急な傾向があった。結果から、これらの分析方法が有効であることを示せた。

2019年度には、リズム指標の頑健性を検証するために、『国際音声記号ハンドブック』掲載のテキスト The north wind and the sun のアメリカ英語音声およびイギリス英語音声を、複数人の話者で条件を変えて収録した。また、三浦氏（当時、本学大学院生）と共同で、日本人英語学習者の音声の分析も開始した（2022年度共同研究グループ経過報告「音声研究と音声教育(2)」を参照）。

2020～2021年度には、学生と共同で、声の大小が聞き手に与える印象が言語によって変わるのかどうか、商品名などに使われる言語音の印象の性別・世代別の差、動物の鳴き声とそれを表す擬声語との研究に着手し、今後も継続して進めていく予定である。成果が未公開であるため、詳細の報告は控える。これらは、いずれも、音の持つ印

---

象についての研究である。ソシユール以来の言語学では言語音と意味との関係は恣意的であるとされるが、実際には音象徴のようなものがある。音の印象についての研究は、マーケティングの領域では注目されているが、言語学・音声学の領域ではまだまだ数が少ない。音声学や言語学で着目されることの少ない音象徴やその他の印象についての研究を進めていきたい。

余談になるが、エキマトペ（富士通株式会社）をご存じだろうか。「駅のアナウンスや電車の音といった環境音を、文字や手話映像・オノマトペとして視覚的にディスプレイ表示できる装置」で

「聴覚障がい者が、必要な情報をタイムリーに感じ取る事ができる安全安心な駅利用を目指して」いる。エキマトペは今年（2022年度）グッドデザイン賞（公益財団法人日本デザイン振興会）を受賞した。音はそれほど重要なのである。

[1] Komatsu, M. (2018). Comparison of prosody of American and British English using a speech corpus: A preliminary analysis. 日本英語学会第36回大会発表（招聘），横浜国立大学，2018年11月。（*JELS*, 36 (2019), 52-57 に収録）

[2] 小松雅彦（2019）音声コーパスを用いたアメリカ英語とイギリス英語の韻律の比較：コーパスの試作と予備的分析. *Sophia University Working Papers in Phonetics*, 2019, 23-34.

